

*書評と紹介

『新自由主義批判の再構築——企業社会・開発主義・福祉国家』

(赤堀正成・岩佐卓也編著)

野営地にて——あるいはレーニンがクラシックを聴かないこと。

2010年10月04日

感想。



(法律文化社、2010年8月
3,150円(税込))

赤堀正成・岩佐卓也の『新自由主義批判の再構築』(法律文化社)を読んできた。検討・批判の対象となるのが主として企業主義・開発主義の論者であるため、気になったからである。

というのも、私の記事を読んでもくださった方々であればお分かりかもしれないが、私は基本的にポリティックの人々、つまり木下氏、後藤氏、渡辺氏に理論的影響をおっている。日本の社会統合に関しては企業主義と開発主義の両輪でもって説明が出来ると考えているし、新自由主義の影響も、それら既存

の社会統合からの延長線上で理解できるというスタンスに立つ。

それがどのような意味を持つているのかと言えば、彼らの社会認識がなにより実践的であり、かつこれまで社会運動や社会統合を批判・総括する視点に立つものだと考えているからである。つまり、理論的に妥当であるかどうかだけでなく、私にとっては社会変革の理論として読めることに、上述の論者たちの価値を見いだせるのである。ただ急いで付け加えねばならないことは、もちろん彼らの主張がすべて正しいというつもりは全くない。

話を最初に戻そう。『新自由主義批判の再構築』（以下、本書と呼称）では、繰り返すが主として企業主義・開発主義が検討の対象となるのだが、その切り口は、企業主義や開発主義を批判していたはずの人々が、それを優先的でもしかかも本質的な批判対象とみなすがために、既存の社会統合を攻撃対象とする新自由主義を肯定・論者によっては積極的に評価してしまうことに対して警鐘を鳴らすというものである。

まだ全体を一読しただけであるので、具体的な議論に関してはまた改めて確認したい。ただ、この本を読んで私が何より言いたいことは、「で、だからなに？」ということである。

本書の論者たちの主張に関して、理解はできる。そしておそらく、批判の内容としては間違っていない。日本の新自由主義が、企業主義や開発主義を批判しながらも、ある種の共犯関係を取り結びながら推進される中においては、純然たる体制派としての新自由主義者と、社会変革を階級関係や歴史的総括ののっとなって目論むマルクス主義者が、既存の社会統合を批判するという共通点をもって理論的に共闘することなど、危険極まりないスタンスであるという主張は、なるほどと思わされる。

◇ Ctrl キーを押さえながら上のアドレスをクリックすると、サイトに行きます。

書評：『新自由主義批判の再構築』（野宮地にて）

しかしそれ以上に、それだけ労働運動や社会運動がオルタナティブを示せてこなかったことの証左として、またヘゲモニー関係として社会をとらえることとして、ポリティックの彼らが行ってきた実践のための理論構築の意義を、果たして本書の論者たちは理解しているのだろうか。すぐにオルタナティブを示せとは言わない。個々の論者によってスタンスにはズレがあることも認めよう。ただだからと言って、これらの主張が正しいものだと思えない。タイトルが批判の再検討なら分かる。ただこれが、再構築と言えるのか私には納得のいくものではない。

いささか感情的な物言いになってしまった。ゆっくりと読み直し、少しずつでも検討していきたい。

◇現代労働組合研究会のHPへ（TOP）

<http://e-kyodo.sakura.ne.jp/roudou/111210roudou-index.htm>

<http://liberation.paslog.jp/article/1597409.html>